

2. シドニー・オリンピック・パークの歴史と現状

尾崎 正峰

今年2月、シドニー・オリンピック・パークを久方ぶりに訪れた。筆者が同地を最初に訪れたのは2000年に開催されたパラリンピック・シドニー大会の調査のためであった。メイン・スタジアムをはじめとする数多くの競技場、そして、多くのボランティアも関わっていた大会の賑わいは印象に残るものであった。その一方で、競技会場の周辺の土地は「殺風景」といってもよいものであった。

それから10数年の時を経た現在、プロスポーツの試合や音楽などのイベント会場、そして、近隣の住民のスポーツをする場などのスポーツ関連の多様な利用はもとより、隣接する地区はビジネス街として数多くのオフィスビルが建ち並び、それに続く地域では住宅地開発が盛んに行われるなど、開発が進んでいた(右図、各写真参照)。

オリンピックを契機とした「開発」、その喧噪を通り過ぎた後、すなわちオリンピックの後に何が残されたのかという点は、“Olympic Legacy”などの用語に示されるように、現在、大きな関心事となっている。その点についてオーストラリアにおける研究状況を概観すれば、シドニー大会前にはさまざまな論点をめぐっての研究の蓄積がある(Cashman & Hughes (eds.) (1999)、Marwick (1993)、など)といえるが、大会後の実態や中長期的な影響などの検証を主眼とする研究は必ずしも多くない(Cashman (2006) など)。

筆者の「オーストラリアの社会とスポーツ」研究(高津・尾崎編(2006)など)におけるこのテーマの位置づけは現時点では未知数であるが、シドニー・オリンピックというオーストラリアの社会とスポーツにとって大きな出来事をとらえていくことの重要性は疑いのないところであろう。ここでは、今後の検討作業の手がかりをとらえるこ

とをねらいとして、いくつかの素材を提示することとした。



シドニー・オリンピック・パーク全体図



メイン・スタジアム(著者撮影、以下の写真も同)

1. “Olympic Legacy” をめぐって

“Olympic Legacy” は、the Olympic Games Global Impact (OGGI) programme (2001)を嚆矢とし (Cashman、2011)、2002年11月14日から16日にかけてシンポジウム“The Legacy of the Olympic Games 1984-2000”が開催されたことが、議論の本格化を象徴するものといえる。

同シンポジウムの抄録集である de Moragas, M. et al (2003) の目次は以下の通りである。

1. Understanding Olympic Legacy and its Historical Development
2. Urban and Environmental Legacies of the Olympic Games
3. The Sporting Legacy of the Olympic Games
4. Olympic Economic and Tourism Legacies
5. Political Legacies of the Olympic Games
6. Cultural, Social and Communication Legacies of the Olympic Games
7. Olympic Education and Documentation Legacies
8. Organising and Planning Future Olympic Legacies

非常に大部な報告書のなかから特徴的と思われるものを以下にアトランダムに抜き出してみる。

Legacy の定義の困難

“Legacy”とは、そもそも多義的な用語であり、異なる言語、文化のなかで、異なる意味合いで理解される。また、地域的要因と同時にグローバルな要因に影響される。

逆に言えば、国際的なものとしてと同時に、都市、地域、国それぞれのレベル固有の概念としてとらえられうる。

招致段階からの意識化

Legacy の内容として、地域への利益 (benefits)、オリンピック・ムーブメントの継続性への貢献など、考え得る長期的な効果 (effects) を招致の第一歩の段階から意識化することが、招致の審査過程において鍵となる。

持続可能で、長期にわたる Legacy

環境保護という側面にとどまらず、社会的、経済的発展の文脈に対しても関連するものとして視野を拡げることがもとめられる。

有形無形の Legacy

これまでの開催都市ごとに異なる多くの側面がある。「有形」のものとして、都市計画、建築(物)、スポーツインフラ、経済発展、観光の展開、など。「無形」のものとして、開催ノウハウの蓄積、文化交流、排他的でない経験、教育、人々の記憶、ヴォランティア、新しい種目を含めたスポーツの興隆、などがある。

経済的インパクト

もっとも多く語られる点であるが、その具体的な成果を計測することが困難である。

スポーツの領域におけるレガシー (Sporting Legacy)

アスリートを主人公とし、その権利を擁護する。多くの人々を巻き込むこと、とくに女性の参加の増大はスポーツのユニヴァーサルな実践の展開を促す。

また、ロゲ IOC 会長はシンポジウムに際して、以下のように発言している。

「白い巨象 (White Elephant)」との表現で、「オリンピックの名の下に華美で派手な開発=財政の膨張が進むことへの危惧」を表明し、最小限のコストでアスリートと市民 (citizens) にとっての最大限の利益を生むことを強調している。そのほかにも、「メリットだけではなくリスクへの意識も」、「持続可能で長期的なヴィジョンを」、「高いパフォーマンス、およびスポーツ・フォア・オールのための機会の増大を」などについて指摘を行っている。

これらの議論を概観すると、Legacy に関する検討が始まった時点において、オリンピックがもたらすプラス面のみならず、ネガティブな側面や考慮すべき点についての指摘がなされていたことができる。

2. シドニー・オリンピック・パーク

～歴史的背景と現在

(1) アボリジナルの人々の土地から

“Homebush Bay”へ

現在、シドニー・オリンピック・パークと呼ばれる地域は、シドニー中心部の西側に位置する760ヘクタールの広さがある土地である。歴史をさかのぼれば、アボリジナルの Wann-gal 一族の生活の場であり、当時は、グレー・マングローブが生い茂る豊かな森に囲まれていたといわれる。

この土地がいわゆる西洋の歴史に登場することになる直接の要因は、イギリスによる入植の始まりであった。1794年、Thomas Laycock がこの土地を“Homebush Bay”と銘々したが、この時、Wann-gal 一族の Bennelong (1764?～1813) が土地を取り仕切っていた。イギリスという外部からの入植の開始は、アボリジナルへの迫害、収奪の歴史のはじまりでもあった。その後、入植者の上層階級の住宅としての開発が進むと同時に、シドニーにおける第一級の競馬会場としての利用(1841～59)もなされていた。

こうした階層性を表象していたこの土地をめぐる状況は、19世紀末以降大きく変化していくことになる。社会の近代化とともに、武器の格納地区、屠殺場、煉瓦工場の材料の採掘場(このために巨大な pit (窪地)が残されることになる。シドニー大会の準備過程でこの“Brickpit”は環境を重視する大会テーマの象徴的な存在とされていく。後述。写真参照)などによって、景観は著しく変貌した。続く1960年代以降、工場の廃棄物、家庭からのゴミの投棄によって、ダイオキシン、アスベスト等、毒性の強い産業廃棄物の集積場となった結果、「汚染された土地」という不名誉な呼称を付されることとなった。

(2) 「オリンピック 2000」の決定と「オリンピック・パーク」

1970年代以降、「汚染された土地」の再生への動きが出始めた。この時期は、数度にわたるオリ

ンピック招致活動も並行して行われていた。この二つの流れが合流し、開発が加速化するののは、2000年大会の開催決定であった (McGeoch (1994)、など)。



現在の“Brickpit”

オリンピックの競技のためのスポーツ施設建設を中心とする再開発と同時に、環境への注目もなされた。1994年リレハンメル冬季大会において環境への配慮が重視されていたことにみられるように、環境(問題)はオリンピックにとって大きな関心事となってきていた。その流れの中で、シドニー大会において環境重視を掲げ、主会場となるオリンピック・パーク周辺の土地再生(浄化)に取り組んだ。加えて、ゴミ等の排出物、廃棄物の最小化、リサイクル等、環境に対するより全面的な取り組みの展開を図っていった。こうした動きが生み出された背景には、Greenpeace Australia が招致過程における計画策定の段階から関与していることもあったといえる。

(3) オリンピック後の「停滞」から「再開発」へ

オリンピックの終了後、2001年、Sydney Olympic Park Authority Act 2001 No 57 の制定とともに Sydney Olympic Park Authority (SOPA) 設立された。制度上の対応は図られたものの、利用されることが少ない施設群に対して、

(ロゲ会長の発言をもじったものと思われる)「白い巨象の荒れ地」(Cashman (2006) : 31) など厳しい指摘が続いた。メガイベントのために建設された大型施設の維持費の拡大という事例は数多いが、シドニー・オリンピック・パークもその例に漏れなかった。この事態に対するメディアによる批判が相次ぎ、2003年の州選挙の争点ともなった。「転機」となったのは、2003年 ラグビー・ワールドカップの開催とされる。既存施設の活用で、世界規模の大会を財政的に成功に導いたとされる。それ以後、さまざまなスポーツイベントの開催拠点として活用されているとされる。



オリンピック・パーク駅周辺のホテル群



オリンピック・パーク周辺のオフィスビル群

(4) Legacy の創出

現在のオリンピック・パーク(周辺)は、前述のように、世界最高度のスポーツ競技会開催が可能な施設の集積地、人々のスポーツ、アクティヴ・レクリエーションの場、環境(保護)のショーケース(湿地帯、野生動植物の生息地)、ビジネス拠点、(高級)住宅地域など多様な性格を有する土地となっている。とくに、煉瓦工場の材料の採掘場の「跡地」で廃棄物の集積地であった“Brickpit”が環境(保護)のシンボリックスポットとなり、“Ringwalk”がイベントにも活用されている。その活況ぶりをとらえてオリンピックの好影響、Legacyの創出という評価がなされてきている。



Sports Halls 入口(種々の屋内施設)



“Brickpit”内の“Ringwalk”

その一方で、地域開発の進行は著しく、Brickpit 周辺はさまざまなビルが建ち並び、建設中のものが数多いという現実もある。



“Brickpit”の先にビル群が見える

おわりに

シドニー・オリンピック・パーク周辺の土地は歴史的にさまざまな様相を呈してきたが、オリンピックというスポーツ事象を媒介とした変貌は、過去と比較しても最大のものと言えるであろう。しかし、大会後にもたらされたオリンピック・パーク周辺の土地の変容は、スポーツとは直接関係のない領域での主導によって進められた側面も強い。さらにいえば、シドニー大会決定時、そして大会開催時には“Olympic Legacy”という言葉は明確、あるいは公的には論じられていない。

その点からするならば、オーストラリアのスポーツ、あるいはシドニー大会をとらえようとする場合、オリンピックと「開発」の問題、あるいは“Olympic Legacy”をどこまでふまえていくのかについて検討していく必要がある。そのことと同時に、そもそもオリンピックと「開発」、あるいは“Olympic Legacy”とはどこまでを射程とするのかという点からも問いを立てていくことが必要であると思われる。

【補論－オリンピック 2020 と東京の「開発」】

オリンピックを媒介とする「開発」の問題は、2020年大会の東京開催決定によって、一層の現実味を持って立ち現れてきた。早くも、「新国立競技場」をめぐる議論が起こっている（槇（2014）、森（2014）、など）。一方で、オリンピックによる「開発」への楽観的な見取り図も数多く提起されている（野村総合研究所（2014）、東京都市計画研究会編（2014）など）。

筆者は、2016年大会の招致活動が始まった時点から、東京における地域スポーツ振興の歴史と現状をふまえつつ、さまざまな開発構想のいずれもが実現せずデッドロックに乗り上げていた臨海副都心開発の起死回生策としてオリンピックを位置付けることに象徴的なように、「開発」のための「口実に過ぎない」と指摘してきた（尾崎 2007、2009、2011、2012）。また、1964年大会の招致過程そのものと同時に、選手村の選定をめぐる「候補地」の歴史について明らかにしてきた（尾崎 2002）が、グローバル化などさまざまな情勢が変化している現代においてオリンピックを契機としてどのような影響が現れてくるのか。2020年に向けての検討点のいくつかはすでに提示しているが（尾崎、2013）、スポーツイベントがもたらすものの多面的な考察（鈴木 2013）や1998年の長野オリンピック後の地域の現状の検証（石坂・松林、2013）などの研究成果が公にされてきたことも含め、大会へ向けての「開発」、大会後の影響、スポーツ振興を求める社会運動なども視野に入れた検討が求められよう。

【参考文献】

<日本語文献>

- * 今泉宜子（2013）『明治神宮：「伝統」を創った大プロジェクト』新潮社。
- * 今泉宜子（2008）『明治神宮戦後復興の軌跡』鹿島出版会。
- * 稲垣正浩（2013）「オリンピックはマネージャーのアリーナか」『世界』2013年11月号、岩

波書店。

- * 石坂友司、松林秀樹編著 (2013) 『<オリンピックの遺産>の社会学』 青弓社。
- * 高津勝・尾崎正峰編 (2006) 『越境するスポーツ』 創文企画。
- * 槇文彦編 (2014) 『新国立競技場、何が問題か: オリンピックの 17 日間と神宮の杜の 100 年』 平凡社。
- * 森まゆみ編 (2014) 『異議あり! 新国立競技場—2020 年オリンピックを市民の手に』 岩波書店。
- * 野村総合研究所 (2014) 『東京・首都圏はこう変わる! 未来計画 2020』 日本経済新聞社。
- * 尾崎正峰 (2002) 「スポーツ政策の形成過程に関する一研究」『一橋大学研究年報人文科学研究』 通巻 39 号。
- * 尾崎正峰 (2007) 「オリンピック、スポーツイベントと都市」、柴田徳衛編『東京問題』クリエイツかもがわ。
- * 尾崎正峰 (2009) 「オリンピックと地域スポーツ振興の架橋」『世界』通巻 798 号 (2009 年 12 月号) 岩波書店。
- * 尾崎正峰 (2011) 『『日常』と『非日常』が共鳴するスポーツ環境を』 渡辺治、進藤兵編『東京をどうするか』 岩波書店。
- * 尾崎正峰 (2012) 「日常生活圏域からスポーツイベントを考える」『都市問題』第 103 巻第 7 号、後藤・安田記念東京都市研究所。
- * 尾崎正峰 (2013) 『『五輪暴走』をおしとどめるために』『東京』2013 年 11 月号、東京自治問題研究所。
- * 鈴木直文 (2013) 「FIFA ワールドカップと開発」『21 世紀のスポーツ社会学』 創文企画。
- * 東京都市計画研究会編 (2014) 『東京 2020 計画地図』 かんき出版。
- * 内田樹、小田嶋隆、平川克美 (2014) 『街場の五輪論』 朝日新聞出版。
- * 山口輝臣 (2005) 『明治神宮の出現』 吉川弘文館。

<英語文献>

- * Bairner, A. & Molnar. G. (eds) (2010), *The Politics of the Olympics*, Routledge.
- * Cashman, R. & Hughes, A. (eds.) (1999), *Staging the Olympics: The Event & Its Impact*, UNSW Press.
- * Cashman, R. (2006) *The Bitter-Sweet Awakening: The Legacy of the Sydney 2000 Olympic Games*, Walla Walla Press.
- * Cashman, R. (2011), *Sydney Olympic Park 2000 to 2010: History and Legacy*, Walla Walla Press.
- * Gordon, H. (2003), *The Time of our Lives: Inside the Sydney Olympics*, UQP.
- * Marwick, P. (1993), *Sydney Olympics 2000: Economic Impact Study Volume 1*.
- * Horne, J. & Manzenreiter, W. (eds) (2006), *Sport Mega-Events: Social Scientific Analyses of a Global Phenomenon*, Blackwell Publishing.
- * McGeoch, R. (1994), *The Bid: How Australia won the 2000 Games*, William Heinemann Australia.
- * de Moragas, M., Kennett, C. & Puig, N. (2003), *The Legacy of the Olympic Games 1984-2000*, International Olympic Committee.
- * Toohey, K. and Taylor, T. (eds) (2011), *Australian Sport: Antipodean Waves of Change*, Routledge.